**ヨハネの福音書　第６章　41～71節**　　　　　6月12日 レポーター　鶴井

Q1

41節「私は天から下ってきたパンである」48節「わたしはいのちのパンです」

51節「またわたしが与えようとするパンは～わたしの肉です」54節「わたしの肉を食べ、血を飲むものは永遠のいのちを持っている」などと述べられているが、ここでいう「肉（パン）」は物質的な肉を表しているのか、比喩的なものか。比喩的なものとすると何のメタファーであったのか。

Q2

42節でユダヤ人がイエスの生い立ちを指摘し、救い主としての存在に疑問を抱いている。一見不利な条件にしか見えないが、イエスが普通の家庭から生まれ救い主となったことに意図があったのだろうか。

Q3

そうした身分や家柄の低いイエスを神の子と認め信じることができるのか。イエスキリストを信じる道を44～45節で「父が引き寄せられない限り」「神によって教えられる」65節「父のみこころによるのでないかぎり」と説き神に主体性をおいているが、逆に我々は常に受動的であり何もできないのか。

Q4

61～62節でイエスの話を信じようとしない弟子に「このことでつまずくのか」「では、人の子がもといた所に上るのを見たら、（どうなるのか）」と帰結文を曖昧にぼかしているが、ここでイエスが示そうとしたことは何か。

補足　人の子がもといた所に上る　とは何を示唆しているのか

Q5

63節で、イエスがさんざん「肉」の重要性を訴えてきたのにも関わらず「肉」を無益だと手のひらを返したような発言をしているがこれまで言ったことと矛盾していないか。

参考

ヨセフ・・・イエスの父とされている（神の方ではなく）。大工をしており、イエス以外にも子がいて（イエスの兄弟）貧しい暮らしをしていた。

預言者・・・神のことば、それも倫理性を強く帯びたことばを、神から預かって語る人々

マナ・・・何の産物か諸説あるが、露が乾いたあとに残る薄い鱗もしくは霜のような外見であり、

　　　　白く、蜜を入れたせんべいのように甘いとされる

カペナウム・・・ガリラヤ湖の北西岸にある町。今日のイスラエルのテル・フームにあったとされている。

十二弟子・・・最初にイエスによって選ばれた12人の弟子集団。イエスの復活の証人であった。

シモン・ペテロ・・・ペトロとも。十二弟子のリーダー的存在。

イスカリオテ・・・ユダヤ地方のカリオテ村の人の意。

聖餐式（せいさんしき）・・・イエスが最後の晩餐でパンとぶどう酒を弟子たちに与え「パンは私のからだであり、杯は私の血による契約である」と言った言葉を記念して、パンとぶどう酒を会衆（かいしゅう。キリスト教会の者らのこと）に分けるキリスト教の儀式。